

建仁元年『石清水社歌合』注釈

田口暢之

本稿は建仁元年（一一〇一）十二月二十八日に石清水社へ奉納された『石清水社歌合』の注釈である。現存諸本は「旅宿風」題十五番を収めるのみであるが、元來は「社頭松」・「月前雪」題を加えた三題四十五番で、谷山茂・樋口芳麻呂『未刊中世歌合集 上』（古典文庫、一九五九年）が二十三首を集成している。なお、ほかに慈円の歌稿と思われる五首（拾玉集・四一八八・四一八九・四一九一・四一九三・四一九四）が見える。

建仁元年は七月に和歌所が設置され、『新古今集』の編纂が始まった年であり、当該歌合の作者も後鳥羽院以下、藤原俊成・定家、宮内卿・俊成卿女など新古今時代を代表する歌人が目立つ。また、後鳥羽院は元久元年（一一〇四）まで毎年のように石清水社へ歌合を奉納するが、現存する資料の中で当該歌合はその最初期のものである。奉納の様子が『明月記』に記される点も貴重であろう。判者は藤原俊成である可能性が高い（拙稿「建仁元年『石清水社歌合』の判者―鶴見大学図書館本の紹介を兼ねて―」汲古80、二〇二二年十二月）。

以下、伝本の書誌を記す（一部、前掲拙稿の記述と重なる）。

- ・国立公文書館内閣文庫本

請求記号・二〇一・〇二二二。袋綴。一冊。（江戸中期）写。茶色無地表紙〔原装〕。縦二七・四糎×横一九・三糎。外題、表紙左肩の白題簽（縦一七・七糎×横三・六糎）に「建仁元年石清水社歌合 全」と書写〔本文別筆〕。内

題、「石清水社哥合 建仁元年十二月廿八日」〔本文同筆〕。料紙、楮紙。見返しも同じ。墨付、一一丁。遊紙、前後各一丁。每半葉八行。和歌二行書（上句末で改行）。字高、約二〇・八糎。奥書・識語なし。蔵書印、一才右上と一一ウ左上に「太政官／文庫」（朱・陽・方・単。縦四・五糎×横四・五糎）。

・鶴見大学図書館本

登録番号・一四一八七〇六。袋綴。一冊。〔江戸中期〕写。薄萌葱色布目地金銀泥下絵表紙〔原裝〕。縦二八・三糎×横一九・九糎。外題なし。内題、「石清水社哥合 建仁元年十二月廿八日」〔本文同筆〕。料紙、楮紙。見返しも同じ。墨付、一一丁。遊紙、前後各一丁。每半葉八行。和歌二行書（上句末で改行）。字高、約二〇・五糎。奥書・識語なし。蔵書印なし。前遊紙裏に、

此哥合各三百短歌
題

社頭松 月前雪 旅宿嵐

という他本にない記述がある〔本文同筆〕。本文は内閣文庫本に極めて近い。

・彰考館本

整理番号・巳一一・〇七二一三。原本未見。前掲『未刊中世歌合集 上』によると、「紙表紙、胡蝶装、縦二五・八糎、横十七・九糎、一面八行、墨付十一枚の近世中期頃写本」。同書に内閣文庫本との異同が示される。「一番」などの番数は全体にわたって記されず、一・二番歌は勝負付を欠く。

・群馬大学総合情報メディアセンター本

整理番号・N九一一・一八／I九六。DOI：10.20730/100040538。袋綴。一冊。〔江戸後期〕写。砥粉色布目地表紙〔原裝〕。縦二六・四糎×横一七・九糎。外題、表紙左肩の白題簽（縦一六・五糎×横三・九糎）に「石清水

社哥合「全」と書写〔本文別筆〕。内題、「石清水社哥合／建仁元年十二月廿八日」〔本文同筆〕〔「建仁」に朱引あり〕。料紙、楮紙。見返しも同じ。墨付、八丁。遊紙、前一丁、後なし。每半葉九行、和歌一行書。字高、約一八・七糎。奥書・識語なし。蔵書印なし。前遊紙裏に「新田義美氏／御寄贈」の印あり。一〇八・十一・十三〃十五番の勝負付は朱。

内題の後に、他本にはない次の作者一覧をもつ。

作者左方

女房 内大臣 前権僧正慈円

権中納言隆房 公継卿 経家卿

通光卿 沙弥寂信 沙弥积阿

俊成卿女 隆信朝臣 有家朝臣

定家朝臣 具親 家長

右方

忠良卿 小侍従 宮内卿

兼宗卿 通具朝臣 法印静賢

越前 沙弥生蓮 中納言

沙弥寂蓮 保季朝臣 鴨長明

雅経 道清 秀能

〔附記〕

貴重な資料の閲覧・調査をご許可くださった国立公文書館、群馬大学総合情報メディアセンター、鶴見大学図書館に厚く御礼申し上げます。

なお、本稿はJSPS科研費22K00303（研究代表者：加藤弓枝）による成果の一部である。

【凡例】

- 一、まず歌番号と整定本文を掲げ、次に他出・通釈・参考・語釈、必要に応じて補説の項を設けた。
 - 一、底本は国立公文書館内閣文庫本（二〇一・〇二二）である（『新編国歌大観』、谷山茂・樋口芳麻呂『未刊中世歌合集 上』（古典文庫、一九五九年）に同じ）。
- 現在知られる次の三本（最初の一字は略称）と校合し、主な異同は語釈で触れた。

・鶴見大学図書館本（二四一八七〇六）

・彰彰考館本（巳二・〇七二一三）。前掲『未刊中世歌合集 上』参照。

・群群馬大学総合情報メディアセンター本（N九一・一八/I九六。DOI: 10.20730/100040538）

なお、底本の翻刻および校異の詳細は「中世歌合DB（仮）」（二〇二三年四月公開予定）参照。

- 一、他出は作品名、詞書、歌番号を記し、異同のある部分のみ本文を掲げた。
- 一、通釈は逐語訳を原則とし、私に言葉を補った場合は（ ）に括弧で区別した。
- 一、参考には和歌の作者が参考にしたと思われる先行歌（本歌を含む）、および和歌の読解に資する類想歌を掲げた。
- 一、私家集の引用は『新編私家集大成』、『万葉集』の引用は『校本万葉集』別冊所収の廣瀬本（歌番号は国歌大観）、それ以外の和歌の引用は『新編国歌大観』、物語などは『新編日本古典文学全集』により、私に表記を改めた。

一番 旅宿風

左勝

女房後鳥羽院

1草まぐら結ばぬ夢は夜ごろへてただ山風の松にふく声

右

忠良

2雲ちかき峰の木の葉を片敷きて枕の下にあらしをぞ聞く

右歌、末の句などよろしく聞こえ侍るを、左歌、「結ばぬ夢は夜ごろへて」と置きて、「ただ山風の」と侍る心・詞、なほありがたく聞こえ侍れば、左無限勝よし侍りとや。

【他出】

〔左歌〕『後鳥羽院御集』（旅宿風・一五六六）。「同〔建仁元年〕十二月廿八日石清水社歌合」の詞書を受ける。

〔右歌〕『夫木抄』（雑十八・旅・石清水三首歌合、旅宿風・一六八九〇）。

【通釈】

一番 旅先で宿った際の嵐

左勝

女房後鳥羽院

1草の枕は（強風のため、よくも）結ばず、結ぶことのない夢は幾夜も続いて、ただ山風が松に吹きわたる音ばかり。

右

忠良

2雲に近い山頂の木の葉を独り寝の床に敷いて、枕の下に（ふもとへ吹きおろす）強風の音を聞くことだ。

右歌は下の句などが素晴らしく聞こえますけれども、左歌は「結ぶことのない夢は幾夜も続いて」と置いて、

「ただ山風が」とございます趣向・表現はやはりめつたにないように聞こえますので、左がこのうえない勝の旨ですとか。

【参考】

- ① 滝の音松のあらしを枕にてむすばぬ夢のむすほはれつつ（老若五十首歌合・雑・二百廿一番右・四四二・雅経）
 ② 面影は教へし宿に先だちてこたへぬ風の松にふく声

（六百番歌合・尋恋・卅番左・六五九・定家／三百六十番歌合・雑・卅番右・六三六／定家家隆両卿撰歌合・三十二番左・六三）

- ③ 山遠雲埋_二行客跡_一 松寒風破_二旅人夢_一（和漢朗詠集・雲・四〇四・无名）

- ④ 山の端は峰の木の葉にきほひつつ雲よりおろすさを鹿の声（正治初度百首・山家・二九一・式子内親王）

- ⑤ 風をや峰の木の葉はさそふらん散れば枕に音きこゆなり（仙洞十人歌合・山風・卅四番右・六八・寂蓮）

【語釈】

○ 旅宿風 異文「旅宿風」（彰）は各歌の内容や他出などにより非。「旅宿」は旅先で宿ること。「嵐」は強風の意で、多く秋や冬に詠まれる。当該歌合は十二月二十八日に奉納されており、冬に寄せる。同題の先行例は見えないが、後世の『院御歌合』（享徳元年）などに継承される。先行の類似題としては、当該歌合の二年前に定家が「鞆中晩嵐」題を「いづこにか今宵は宿をかり衣ひもゆふ暮の峯の嵐に」（拾遺愚草・正治元年冬左大臣家十首歌合・二六七八）と詠み、『新古今集』（羈旅・九五二）に入集する。後年には家隆が「旅浦嵐」題を「夕嵐うらわけ衣ふきはらへ藻塩のけぶり袖にたなびく」（玉吟集・前参議信成卿北野会に・二六一九）と詠む。○ 女房（後鳥羽院） 一一八〇〜一二三九年。在位一一八三〜九八年。高倉院皇子。正治元年（一一九九）から和歌を詠みはじめ、同二年には二度

の百首歌のほか、『院当座歌合』や『仙洞十人歌合』など、翌建仁元年（一一二〇）にも『老若五十首歌合』、『新宮操歌合』、『鳥羽殿影供歌合』、また『仙洞句題五十首』など多くの歌合や定数歌を開催。急速に詠歌の実力を高め、『新古今集』の編纂を命じる。当該歌合は同年末に開催された。『新古今集』初出。当時、上皇、二十二歳。

○草まくら結ばぬ夢は「草まくら」は草を結んで作る枕の意。「結」の枕詞でもある。「旅宿」題でありながら「草まくら結ばぬ」と詠みはじめる意外性が眼目。「嵐」の激しさを強調する。「結ばぬ夢」が幾晩も続くと詠むことで「旅宿」の題意を満たす。類例の言葉続きとして「草枕結ぶ夢路は都にてさむるは旅の空ぞ悲しき」（治承三十六人歌合・旅・二九・実定／月詣集・羈旅・二六〇・三句「さむれば旅の」の先行例がある。類想の先行歌には「旅寝する宮城が原の草枕ゆめむすばせぬ鹿の声かな」（歌合文治二年・鹿・九番右・八六・経泰）や、当該歌合と同年に詠まれた①などがある。○夜ごころへて「夜ごころ」は幾夜の意で、院政期あたりから用例が増え、勅撰集では『新古今集』に初めて「聞きてしもなほぞ寝られぬ時鳥まちし夜ごころの心ならひに」（夏・一九九・有仁）が採られる。「呉竹の葉末にすぎる白雪も夜ごころへぬれば氷とぞなる」（老若五十首歌合・冬・百九十四番右・三八八・良経）は「夜ごころ」と「経」を詠んだ先行例。後鳥羽院は同時期に「花のかけ旅寝の嵐夜ごころへて月ぞなれ行く袖の手枕」（仙洞句題五十首・花下送日・一〇二／後鳥羽院御集・一一六六・初句「花の陰の」）とも詠む。

○ただ山風の松にふく声 類似の表現は②に早く見え、判者俊成は「末句なほよろしき様にや侍らん」と評した。当該歌の趣向は③に通じよう。著名な「吹くからに秋の草木のしをるればむべ山風を風といふらむ」（古今集・秋下・二四九・文屋康秀）などにより、「山風」によって「嵐」の題意を満たす。「さらぬだに秋の旅寝は悲しきに松に吹くなり鳥籠の山風」（新古今集・羈旅・九六七・秀能）のように、「松」に吹く「山風」の「声」は旅寝の悲哀を際立たせる。この秀能歌は『如願法師集』（七九六）によると成立年未詳の「八幡若宮御哥合」の作。後鳥羽院

はほかにも「草まくら旅寝の夢の関守は野にも山にも松にふく風」(後鳥羽院御集・「建仁元年三月」) 外宮御百首・雑・三九八)と詠む。なお、四句に「た、あらしのみ」(群)の異文もあるが、諸本や家集の「山風の」が穩当か。

○忠良 一一六四～一二二五年。藤原基実男。正二位大納言に至る。『正治初度百首』『仙洞十人歌合』『老若五十首歌合』などに出詠し、『千五百番歌合』では判者も務める。『千載集』初出。当時、正二位権大納言。三十八歳。

○雲ちかき峰 「思ひあまりいとすべなみ玉だすき雲ある山に我しめ結ぶ」(古今六帖・服飾・玉襷・三二一九)のように「雲ある山・峰」という表現が多い。「雲ちかき」の先行例としては「秋風と雁にや告ぐる夕暮の雲近きまで行く蛭かな」(正治初度百首・夏・二三八・式子内親王／三百六十番歌合・夏・四十五番右・二三四)などがある。○木の葉を片敷きて 「片敷く」は自分の着物を敷くだけで、恋人と共寝はしないことをいう。ここでは着物のかわりに「木の葉」を敷くと詠んだ。「旅宿」の題意を満たす。「草枕木の葉かたしく寢覚めには鹿のさへさびしかりけり」(散木奇歌集〈書陵部本〉・秋・旅宿鹿・四四九／同〈冷泉家本〉・秋・四四五)などの先行例がある。○枕の下にあらしをぞ聞く 題字「嵐」を詠む。「枕の下」は「しきたへの枕の下に海はあれど人を見るめはおひずぞありける」(古今集・恋・二五九五・紀友則)のように誇張した比喻と組み合わせられることが多かった。もちろん、当該歌も比喩的ではあるが、元来「嵐」は山から吹き下ろす強風を指すため、「雲ちかき峰」の旅寝では「枕の下」に「嵐」の音が聞こえると詠んだ点に工夫があろう。先行する類想歌に④や⑤がある。特に⑤は忠良歌と番えられた作で、直接的な影響関係も想定できよう。

○無限勝よし侍りとや 底本「勝よし」は「勝歎」にも見える字形。「無限〇侍とや」(鶴)、「無限勝持とや」(彰)、「無限勝なりと侍にや」(群)の異同がある。判者と思われる俊成には「右の歌、なほ限りなく侍り」(後京極殿御自歌合・卅六番)といった判詞も見え、「勝よし(または「歎」)は後人の傍記が本文化した可能性もあろう(前

掲「建仁元年『石清水社歌合』の判者―鶴見大学図書館本の紹介を兼ねて―」参照。その場合、本来の本文は「無限侍とや（または「にや」）となり、「このうえないですとか（または「でしようか」）の意になる。

二番

左持

内大臣

3しほれ果て結ぶさびしき草枕なにと嵐のあはれそふらむ

右

小侍従

4吹きすぐる峰のあらしも心せよ真木のいたぶし今夜ばかりぞ

左歌、心いとかしく見え侍り。

右歌、姿はよろしく侍るを、「真木のいたぶし」と何事にか侍らん。真木の下などに臥したる心にや。おぼつ

かなく侍れば、勝劣申しがたくや。

【他出】 左右ともなし。

【通釈】

二番

左持

内大臣（通親）

3心も沈みきり露にも濡れそぼって結ぶさびしい草の枕。（さらに）どうしようといって、強風がもの悲しさを加え

ているのだろうか。

右

小侍従

4 吹きすぎる山頂の強風も気を付けておくれ。真木の板に寝るのは今夜だけなのだよ。

左歌は趣向がたいへん面白く見えます。

右歌は一首のスタイルは素晴らしいのですが、「真木の板に寝る」というのはどのようなことでしょうか。真木の下などに寝ているという趣向でしょうか。(意味が)はつきりしませんので、勝敗は申しあげにくいかな。

【参考】

①草の葉にしをれふしぬる袖まくら夢やはむすぶ夜半の白露

(千五百番歌合・雑二・千四百六十一番右・二九二三・雅經)

②大方の時のあはれをうちそへて我が身ひとつの秋にぞありける (正治初度百首・秋・五五六・通親)

③軒ちかき峰のあらしも心せよ木の葉ならでは曇る宿かは

(千五百番歌合・冬一・八百七十一番右・一七四一・寂蓮)

④千鳥なく与謝の浦風こころせよ都こひしき旅の寝覚めに (隆信集・海辺旅宿・三七二)

【語釈】

○内大臣 源通親。一一四九〜一二〇二年。源雅通男。後鳥羽院の父高倉院の近臣。また、後鳥羽院の乳母範子の娘在子を猶子とし、後鳥羽院に入内させて権勢をふるった。内大臣従三位に至る。嘉応二年(一一七〇)『住吉社歌合』や『正治初度百首』などに出詠。正治二年(一二〇〇)『石清水若宮歌合』では判者となり、同年から複数回にわたり『影供歌合』を主催。後鳥羽院歌壇へ与えた影響にも注意される。『千載集』初出。当時、従三位、五十三歳。○しほれ果て 「しほる・しをる」は草葉などが露に濡れたり、その重さでたわんだりすること。また涙も連想されるため、「小萱しく比良のあら野の露けきに心までやはしをればつべき」(正治初度百首・羈旅・

三八六・守覚法親王)のごとく気分が落ち込むことを暗示。ほぼ同時期の類想歌である①のように、当該歌も「草」と旅人の悲哀を結び付ける。○**結びさびしき草枕**「野風のみ寂しき旅の草枕やがてゆひめにきりぎりすなく」(永久百首・蜚・三三二・仲実)のように、草枕を結ぶ旅寝はさびしいというのが通念。「旅宿」の題意を満たす。○**なにと嵐のあはれそらむ**四句は「さもしるき月の光もあるものを何と嵐の秋と告ぐらん」(出観集・秋・二九八)や「谷風は戸を吹きあけて入るものをなにと嵐の窓たたくらん」(山家集・雑・九六六)の先行例がある。題字「嵐」を詠む。ただでさえ寂しい旅寝なのに、なぜ「嵐」はさらに「あはれ」を加えるのかという意。先行する類想歌に「さらぬだに入相の鐘の寂しきにあはれを添ふる虫の声かな」(重家集・寺静聞虫・二七〇)や「松風の音あはれなる山里にさびしさ添ふる蛸の声」(山家集・雑・九四〇)がある。また、通親自身が②を詠むほか、「磯の松風^{松風}にたへぬ折しもあれあはれうちそふ波の音かな」(正治後度百首・海辺・七九・後鳥羽院)や「あはれなる草の枕の仮寝かな夜半のけしきも峰の嵐も」(老若五十首歌合・雑・二百卅三番右・四六六・越前)などの同時代詠も見える。

○**小侍従** 生没年未詳。石清水八幡宮別当紀光清女。母は歌人の花園左大臣家小大進。二条天皇・多子・高倉天皇に出仕。治承三年(一一七九)に出家した後も、『正治初度百首』『千五百番歌合』などに出詠。『千載集』初出。当時八十歳超か。○**吹きすぐる峰のあらしも** 題字「嵐」を詠む。前年に「いつしかと凍るみぎはや朝嵐の吹きすぎて行く跡を見すらん」(正治後度百首・氷・七四四・賀茂季保)があり、後代に「吹きすぐ」と「嵐」を組み合わせる例が散見する。慣れない旅路に「心せよ」と旅人へ呼びかける先行例があるので(後述)、それを前提に旅人だけでなく「あらしも」と言ったか。○**心せよ** ほぼ同時期に③があり、判者定家は「心せよといへる、こひねがはれずや侍らん」と非難する。しかし、用例は院政期から少なからず見え、「草まくら旅寝の人は心せよ有

明の月もかたぶきにけり」(堀河百首・暁・一二八四・師頼／新古今集・羈旅・九二五)のように旅人を氣遣う作や、当該歌と同趣向の④などがある。また、小侍従は「みかりする野辺のきぎすよ心せよそそやはし鷹鈴ならすなり」(太皇太后宮小侍従集・鷹狩・九一)とも詠む。○真木のいたぶし「いたぶし」(群)は判詞の内容に引かれた傍記か。判詞の非難どおり「いたぶし」や「(真木の)下臥」の先行例はなく、意味も分かりにくい。「真木」は檜などの建築用材の美称で、「真木の板戸・板屋」などの例が多い。当該歌合の直前に秀能が「山深み人目絶えたる夕暮れの真木の板戸をとふ嵐かな」(如願法師集・建仁元年十二月二日、影供御哥合・山家夕嵐・八三五)と詠むように、「真木」は山家とも結び付けられやすい。『文治六年女御入内和歌』でも「山野并人家に秋風吹きたる所荻有」と注された「秋風」題に「真木の戸をたたく嵐にこたふれば荻の上葉や主なるらん」(秋 七月・一四七・実房)の作が見える。また「嵐」を詠む場合は「さもこそは今朝の嵐の荒からめあなはしたなの真木の板戸や」(永久百首・嵐・二七〇・忠房)、「真木の板は夜半の嵐にうづもれて木の葉をわくる朝煙かな」(月詣集・十月・落葉・九〇六・覚延法師)、「山陰にたのむ庵も荒れねとや嵐にかろき真木の板葺き」(宝治百首・雑・山家嵐・三七〇二・寂西)のように真木の戸や屋根が嵐に荒れる様子が詠まれやすい。当該歌は「真木の板」の山家に臥すことを「真木のいたぶし」と表現し、「ただでさえ不安な旅寝なのだから、真木の戸や屋根を荒らさないように気を付けよ」と嵐に呼びかける趣向か。

○今夜ばかりぞ 今夜だけの旅寝。四句とともに「旅宿」の題意を満す。

○真木の下などに臥したる心によ 判者は「真木」すなわち檜などの「下」に野宿すると解したか。

三番

左勝

慈円

5 野辺さむし萩の枯れ葉を片敷きて過ぐる嵐を枕にぞ聞く

右

宮内卿

6 仮寝する床の柴垣ひまをあらみうちもあらはに冴ゆる山風

左歌、末句「過ぐる嵐を枕にぞ聞く」といへる心、もつともよろしく侍るべし。よて為_レ勝。

【他出】

〔左歌〕『拾玉集』（旅宿嵐・四一九二・二句「萩の上葉を」・五句「旅寝にぞ聞く」・合点あり）。

『夫木抄』（雑十八・旅・石清水三首歌合、旅宿嵐・一六九一一二）。

〔右歌〕『夫木抄』（雑十三・柴垣・石清水三首歌合、旅宿嵐・一四九九二）。

【通釈】

三番

左勝

慈円

5 野辺は寒い。萩の枯れ葉を独り寝の床に敷いて、吹き過ぎる強風の音を枕に聞くことだ。

右

宮内卿

6 旅先のかりそめの寝床は、柴を編んだ垣根の隙間が大きいので、室内も外であるかのように冷たい山風が。

左歌は下の句の「吹き過ぎる強風の音を枕に聞くことだ」という趣向が、いかにも素晴らしいでしょう。よつて勝とする。

【参考】

- ① 虫の音は弱りはてぬる庭の面に荻の枯れ葉の音ぞ残れる（月詣集・九月・暮秋・七七七・殷富門院大輔）
 ② 嵐をや峰の木の葉はさそふらん散ればまくらに音きこゆなり（仙洞十人歌合・山風・卅四番右・六八・寂蓮）
 ③ 滝の音松のあらしを枕にてむすばぬ夢のむすほはれつつ（老若五十首歌合・雑・二百廿一番右・四四二・雅経）
 ④ 山里の賤の松垣ひまをあらみいたくな吹きそ木枯らしの風（後拾遺集・秋下・山家秋風・三四〇・大宮越前）
 ⑤ とまるべき関屋はうちもあらはにて嵐はげし足柄の山（明日香井集・雑・関路風・一四八四）

【語釈】

○ 慈円 一一五五～一二二五年。藤原忠通男。諡号慈鎮。後鳥羽院の護持僧。天台座主。『正治初度百首』『老若五十首歌合』などをはじめ、主に後鳥羽院歌壇で活躍。著作『愚管抄』。家集『拾玉集』『千載集』初出。当時、天台座主・前権僧正、四十七歳。 ○ 野辺さむし 初句を「野辺さむし」とするのは当該歌以外に見当たらない。「野辺」と「寒し」を取り合わせた先行例に「山風にしほるる野辺の草むらの閨さむし」とや鹿の鳴くらん（太皇太后宮亮平経盛朝臣家歌合・嵐・八番左・三九・師光）や「浅茅わけ宿る月さへ影さむき露ふかくさの野辺の秋風」（撰歌合建元元年八月十五日・野月露涼・三十八番左・七五・俊成卿女）などがあるが、「野辺が寒い」と直接に詠む例は少ない。「旅」の題意を満たす。 ○ 荻の枯れ葉を ①などの先行例があるが、数は多くない。『拾玉集』では「荻の上葉を」。これは『後拾遺集』に「さりとともと思ひし人は音もせで荻の上葉に風ぞ吹くなる」（秋上・三三一・三条小右近）など見え、同時代までの用例も多い。歌ことばとしては熟しているが、「荻の上の方の葉（だけ）」を「敷く」は不自然なので、「枯れ葉」と推敲したか。なお、慈円は当該歌合の歌稿として「古郷の荻の枯れ葉に待ちとりて嶺の嵐の音を聞くかな」（拾玉集・詠三首和歌・旅宿嵐・四一九四）とも詠む。 ○ 片敷きて 「木の葉」な

どの例はあるが（二番歌参照）、「枯れ葉」を片敷くという趣向は珍しく、後世、『隣女集』に「難波江の水の床やさえぬらん落葉かたしく夜半のあし鴨」（江水鳥・一三四八）と「夜な夜なの氷の床やさむからん落葉かたしく池のあし鴨」（水鳥・二二二七）の類例が見える程度。五句の「枕」とともに「宿」の題意を満たす。○過ぐる風を枕にぞ聞く 題字「嵐」を詠む。「嵐」の音は「秋山の嵐の声を聞くとときは木の葉ならねど物ぞかなしき」（拾遺集・秋・二〇七・遍昭／拾遺抄・秋・一二八・五句「我ぞ悲しき」）のように遠くで聞くと詠むのが通例で、同時代でも「思ひこし因幡の山の峰にしも頼めぬ松の嵐をぞ聞く」（老若五十首歌合・雑・二百四十五番右・四九〇・宮内卿）などと詠まれる。その点、「嵐を枕に聞く」という趣向は意外性を持ち、かつ「旅宿」の題意も強調される。『拾玉集』の「旅寝にぞ聞く」を推敲したのもそのためか。類似の趣向は「ふるさとを出でしにまさる涙かな嵐のまくら夢にわかれて」（六百番歌合・旅恋・三十番左・八九九・定家／三百六十番歌合・雑・十番左・五九五）をはじめ、前後の時期にも「月のすむさざ浪山に一夜ねて鹿の鳴く音を枕にぞ聞く」（和歌所影供歌合建仁元年八月・旅月聞鹿・七番左・八五・光範）のほか、②③などが見え、直接的な影響も想定できるか。二番歌も類似する。詠作年未詳の「思ひ出づる寢覚めはおなじ都にて峰の嵐を枕にぞ聞く」（明日香井集・東の道にてよみける歌の中に・一五四七）もある。なお、慈円はほかに「初瀬川さよの枕におとづれて明くる檜原に嵐をぞ聞く」（拾玉集・雑・三六八六）とも詠む。

○宮内卿 生没年未詳。一二〇四、五年頃に二〇歳前で死去か。源師光女。『正治後度百首』『千五百番歌合』の作者。新古今時代を代表する女流歌人の一人。『新古今集』初出。○仮寝する 「仮寝」は仮の宿りで眠ること。「旅宿」の題意を満たす。院政期以降に多く詠まれ、同時代には「あはれなる草の枕の仮寝かな夜半のけしきも峰の嵐も」（老若五十首歌合・雑・二百卅三番右・四六六・越前）といった類想歌が見える。○床の柴垣 「柴垣」

の先行例は少なく、「あたらしや賤の柴垣かきつくるたよりにたてる玉のをやなぎ」（月詣集・二月・垣の柳・八三・源仲政）などが見える程度。同時代の定家は「人は住むとばかり見ゆる蚊遣火の煙をたのむ遠の柴垣」（拾遺愚草・奉和無動寺法印早率露胆百首・夏・四三二）や「滝の音みねの嵐もひとつにてうちあらはるる柴の垣かな」（拾遺愚草・閑居百首・雑・三九三）などと詠んでおり、「柴垣」は「旅宿」の題意を強調する景物といえよう。○ひまをあらみ ④は表現も趣向も類似する先行歌。○うちもあらはに 「あらはに」は「花の色をあら

はに愛でば色めきぬいざ暗闇に折りて取りてん」（古今六帖・花・四〇五五・素性）など早くから詠まれているが、当該歌と同じ表現は「かれにけり鶉とともに住みなれし芦のまる屋のうちもあらはに」（正治初度百首・冬・一九六一・讃岐）や「ふしなれし芦のまる屋も霜がれてうちもあらはに宿る月かな」（老若五十首歌合・冬・百五十六番右・三二二・良経）など同時代から見える。また、詠作年未詳の⑤は類想歌。前掲の定家詠「滝の音みねの嵐もひとつにてうちあらはるる柴の垣かな」も参考になる。○牙ゆる山風 この句も当該歌が早い例で、後

代に散見する。「山風が冴える」という趣向自体は「櫛とる武庫の山風さえさえて社も白く雪ふりにけり」（広田社歌合承安二年・杜頭雪・十四番右・二八・道因）や「夜を寒み越の山風さえさえて積もるがうへに積もる白雪」（民部卿家歌合建久六年・深雪・三番左・一四三・隆房）などと詠まれる。宮内卿自身も「おのが里の山風さえて吹くからに都へ出づる小野の炭焼き」（千五百番歌合・冬・三・千二十七番左・二〇五二）と詠む。「山風」により「嵐」の題意を満たす。

○左歌、末句「過ぐる嵐を枕にぞ聞く」といへる心、もつともよろしく侍るべし 前述のように、「嵐を枕に聞く」という趣向は同時代の類例が皆無ではないものの、まだ比較的珍しかったため評価されたか。

四番

左持

隆房

7 暮れぬとてふもとの里に宿れば都へかへす山おろしの風

右

兼宗

8 吹きまよふ深山おろしのはげしさに夢路も知らぬ旅寝なりけり

左、上句はをかく侍るを、末句の「都へかへす」の詞、あまりにたしかにや侍らん。

右歌、末句は無為に侍るを、「はげしさ」も少しいかがとて持と申すべくや。

【他出】 左右ともなし。

【通釈】

四番

左持

隆房

7 日が暮れてしまおうと言って麓の里で宿を借りると、(私を) 都へと返すように吹く山おろしの風。

右

兼宗

8 吹き乱れる山おろしの激しさのために、夢を見ることも知らない旅寝であったよ。

左は上句は面白いですが、下句の「都へと返す」の言葉があまりにも露骨ではないでしょうか。

右歌は下句は無難ですが、「激しさ」も少しどうかということ、持と申すべきか。

【参考】

① 山ざくら香籠めに風のさそひきてふもとの里に宿もとむなり(林葉集・春・また、花・一四三)

②浮寝して都へかへる浦風に情をかくる浪の音かな（拾玉集・御裳濯百首・雑・五八一）

③秋ふかき木々の梢に宿かりて都にかよふ山おろしの風（拾遺愚草・閑居百首文治三年冬号越中侍従歌之・秋・三四〇）

④吹きまよふ深山おろしに夢さめて涙もよほす滝の音かな（源氏物語・若紫・四九・光源氏）

⑤あらし吹くたかねの雲をかたしきて夢路もとほし宇津の山越え（正治初度百首・羈旅・七八四・忠良）

【語釈】

○隆房 一一四八～一二〇九年。藤原隆季男。正二位権大納言に至る。『御室五十首』『正治初度百首』などに出詠。笙や琵琶も得意とした。著作『安元御賀記』、家集『隆房集』（三種）、『朗詠百首』、『堀河百首』題による百首。『千載集』初出。当時、正二位前中納言、五十四歳。○暮れぬとて 後代の作ではあるが、「箱根山ふもとの

里に宿とへば暮れぬと急ぐ峰の旅人」（夫木抄・雑二・山・箱根の山・貞応三年百首・八一八六・為家）や「暮れずともふもとの里に宿からん夜やはゆかん山のかげ道」（順徳院百首・雑・八八）の表現が類似する。○ふもと

の里に 先行例には①などがある。「旅」の題意を満たす。○宿かれば 新古今時代以降に用例が増える表現。

題字「宿」を詠む。隆房自身の先行詠「ふしわびぬひなのささやに宿かれば都にすみし月ぞ来にける」（正治初度百首・羈旅・八八四）は月が都からやつてくるようだの意で、風が都へ返すようだという当該歌とは対照的な趣向。また隆房は「深草の里より奥に宿かれば鶉の床ぞ隣なりける」（正治初度百首・羈旅・八八六）とも詠む。

○都へかへす 先行例は見えず、同時代詠も②のほか「草まくら都にかへる夢にては露をもわけぬ物にぞありける」（玉吟集〈東京大学国文学研究室蔵「壬生二品家集」による補遺〉・詠百首和歌文治三年十一月日・雑・旅・一九五）

のように、「かへす」ではなく「かへる」と詠む例ばかりである。○山おろしの風 「嵐」の題意を満たす。③が表現・趣向とも類似する。

○兼宗 一一六三―一二四二年。藤原忠親男。正二位大納言に至る。『六百番歌合』『御室五十首』『千五百番歌合』などに出詠。『千載集』初出。当時、従二位権中納言、三十九歳。○吹きまよふ深山おろしの「深山おろし」により「嵐」の題意を満たす。四句「夢路もしらぬ」とともに④を意識する。④は瘧病の源氏が北山へ行つた際、「曉方になりければ、法華三昧おこなふ堂の懺法の声、山おろしにつきて聞こえくる、いと尊く滝の音に響きあひたり」に続く歌。前日に垣間見た紫上に対する煩惱も覚めるようだとこの寓意もあろうが、兼宗は純粹な叙景へと転換する。○はげしさに 後代に「はげしくて夢をもやぶる風の音に叢ふる夜はさらに寝られず」（嘉元百首・叢・五五・龜山院）という類想歌がある。○夢路も知らぬ 先行例は見えない。「路」の縁で、⑤の「遠し」や「さもこそは跡なき庭と荒れはてめ夢路もたえぬ荻の上風」（玄玉集・草樹下・荻声驚眠・六七九・寂蓮）の「絶ゆ」などと詠む例が多い。○旅寝なりけり 「何よりもはかなき事は夏の夜のあだしの野辺の旅寝なりけり」（久安百首・羈旅・四九四・季通）などの先行例がある。「旅宿」の題意を満たす。

○「都へかへす」の詞、あまりにたしかにや侍らん 「都へかへす」という表現が直接的すぎるといふ難か。たとえば、『中宮亮重家朝臣家歌合』の「とどまらんところ教へよ時鳥たづねゆきつつまたも聞くべく」（郭公・十二番右・五二・生西）に対して、判者俊成は「右の歌は、尋ねゆきつつもまたも聞くべくもなど、あまりたしかなるやうにぞ聞こゆれど、始めよりただ言葉に言ひ下して理つよく見ゆ」と評す。また、『六百番歌合』の「恋衣しほりし袖はそれながら今夜は妻に重ねつるかな」（遇恋・十九番左・六九七・季経）に対しても判者俊成が「しほりし袖はそれながらなどいへるは優に侍るを、下句あまりにたしかにや侍らん」と述べ、負とする。○末句は無為に侍るを 「無為」は特に欠点のないことを意味し、俊成の用例が目立つ。○「はげしさ」も少しいかが 『内大臣家歌合』元永元年十月二日の「山家には槿のから葉の散り敷きて時雨の音もはげしかりけり」（時雨・十二番右・二四・

為実) に対し、判者の源俊頼は「しぐれの音はげしといへる事いかか」と難じて負とした。また、『六百番歌合』の「吉野山すずのかりねに霜さえて松風はげし更けぬこの夜は」(寒松・十番左・五五九・顕昭)も判者俊成が「松風はげしも聞こえざるにや」と難じた。

五番

左

公繼

9 旅寝する心もかなし嵐ふく野辺の草葉はむべし枯れけり

右勝

通具

10 草むすぶ床だに荒るる冬枯れの嵐の底に今夜かも寝ん

左歌、心はいとをかしく侍るを、悲しむべきとや餘りに侍らむ。

右歌、末句など古き姿よろしく侍るにや。まさるにや侍らん。

【他出】

〈左歌〉なし。

〈右歌〉『夫木抄』(雑十三・床・同〔家集〕、旅歌中・一四九〇九・三句「夕暮れの」、五句「今宵だに寝ん」)。

【通釈】

五番

左

公繼

9 旅寝する心も悲しい。強風の吹く野辺の草葉はなるほど枯れたことだ。

10草を結んでいる寝床さえ荒れている、この冬枯れの強風の底で今夜は寝るのだろうか。

左歌は趣向はたいそう面白いですが、悲しむべきだとはあまりにも（という表現）ではないでしょうか。

右歌は下句などの伝統的なスタイルが素晴らしいでしょう。勝るのではないのでしょうか。

【参考】

- ①吹くからに秋の草木のしをるればむべ山風をあらしといふらむ（古今集・秋下・二四九・文屋康秀）
- ②ことごと悲しかりけりむべしこそ秋の心を愁へといひけれ（千載集・秋下・三五二・藤原季通）
- ③山里は嵐の底に雪ふりて軒は夜すがら松の村雨（玄玉集・草樹下・月前松風・七三〇・源資清）
- ④あしひきの山鳥の尾のしだり尾のながながし夜をひとりかもねむ（拾遺集・恋三・七七八・人麻呂）

【語釈】

○公継 一一七五～一二二七年。藤原実定男。左大臣従一位に至る。『御室五十首』『水無瀬殿恋十五首歌合』『千五百番歌合』などに出詠。『水無瀬殿恋十五首歌合』から『若宮撰歌合』『水無瀬桜宮十五番歌合』が派生するが、作者十人のうち公継のみ一首も撰ばれなかった。日記『公継卿記』。『新古今集』初出。当時、従二位権中納言・中宮権大夫、二十七歳。○旅寝する心もかなし「旅宿」の題意を満たす。「小夜中に思へばかなし陸奥のあさかの沼に旅寝しにけり」（金葉集〈二度本〉・雑上・五五四・旅宿・師頼）といった先行歌がある。○嵐ふく題字「嵐」を詠む。○野辺の草葉は 先行の類想歌に「花さきし野辺の草葉も霜がれぬこれにてぞ知る旅の日数は」（久安百首・羈旅・一九六・公能）などがある。○むべし枯れけり「むべ」はなるほど、もつともだの意。①を踏まえた表現。②は「秋」と「心」で「愁」となるのももつともだと詠み、「霜さやく野辺の草葉にあらねど

もなどか人目のかれまさるらむ」(新古今集・恋四・一二四四・醍醐天皇)は「枯れ」と「離れ」を掛ける。対する当該歌にそうした文飾はなく、旅人も悲しいから草葉が枯れるのももつともだと詠む程度。判詞の非難とも関わるか。

○通具 一一七一〜一二二七年。源通親男。正二位大納言に至る。俊成卿女の夫であったが、按察局と婚姻。『明月記』建仁元年(一一二〇)十二月二十八日条には当該歌合奉納の記事に続いて、通具がその件を定家に説明したことが見える。正治二年(一二一〇)九月『院当座歌合』、同年『石清水若宮歌合』、『千五百番歌合』などの作者、また『新古今集』撰者の一人。『新古今集』初出。当時、参議従四位上左中将、三十一歳。なお、当該歌合奉納の翌二十九日に正四位下に叙されている。○草むすぶ 二句「床」とともに「旅宿」の題意を満たす。○床だに荒るる 結ばない草はもちろん、結んで枕にした草さえも荒れるほどの強風と詠み、「旅宿」と「嵐」それぞれの題意を強調する。○冬枯れの 院政期から用例が増える。『新古今集』には「冬枯れの森の朽葉の霜の上に落ちたる月の影のさむけさ」(冬・六〇七・清輔)が入集。○嵐の底に ③の先行例のほか、同時期には「木の葉ふく嵐の底の虫の音にほのかに残る秋の声かな」(千五百番歌合・冬一・八百六十五番右・一七二九・俊成卿女)、「むかし聞く野辺のいはやぞあはれなる嵐の底を夢に見えけん」(千五百番歌合・雜二・千四百二十六番右・二八五三・釈阿)が見え、通具の妻とその祖父の作である点も注意される。○今夜かも寝ん 先行例は見出せないが、「ひとりかも寝む」の形であれば『万葉集』(卷十一・寄物陳思・二八〇二)或本歌)にも見える④など、多くの用例がある。同時代には「かきくもり雨ふる宿の秋風に涙かたしき今宵かも寝ん」(千五百番歌合・恋一・千百五十四番右・二三〇七・家長)、「東の道」で詠んだという「潮も満ちぬ日も夕暮れになるみ瀉いかなる方に今宵かも寝ん」(明日香井集・一五五六)などが見える。

○悲しむべきとや餘りに侍らむ 「とや」、異文「ことや」(群)。「かなし」と詠むのが感傷的すぎる、あるいは表現が直接的すぎるといった批判か。「袖の波むねのけぶりは誰も見よ君がうき名の立つぞかなしき」(六百番歌合・顯恋・六番左・七三一・良経)は判者俊成が「上句は宜しく聞え侍るを、終に悲しきやあまりに侍らん」と批判し、また「須磨の浦や浪に面影たちそひて関吹きこゆる風ぞかなしき」(水無瀬殿恋十五首歌合・関路恋・五十五番右・一一〇・定家)に対しても、判者俊成は「右は関吹きこゆる、よろしく侍るべきを、風ぞかなしき、あまりにやと聞こえ侍るうへに」と批判する。○末句など古き姿 「くかもねん」は『万葉集』に多く見え、勅撰集において『拾遺集』(前掲)・『新勅撰集』・『統後撰集』に各一首見えるなか、『新古今集』には四首も見え、時代的な好尚をも窺わせる。○よろしく侍るにや。まさるにや侍らん 異文「よろしく侍るにや侍らん」(群)。同本の誤脱か。

六番

左勝

経家

11 定めなく嵐にまよふむら雲のそことも知らぬ旅寝をぞする

右

静賢

12 願ふことみつの御山の旅寝とや嶺の嵐やおどろかすらん

左、「嵐にまよふむら雲の」などいへる姿、よろしく侍るにや。すこしは勝り侍るべし。

【他出】 左右ともなし。

【通釈】

六番

左勝

経家

11 方角も定めず強風に吹き乱れる雲々のように、そこという目的地も知らない旅寝をするよ。

右

静賢

12 願っていることが満ちる、三つの御山での旅寝ということ、山頂の強風が眠りを覚ましているのだろうか。

左は「強風に吹き乱れる雲々のように」などと詠んでいるスタイルが素晴らしいでしょう。少しは勝るでしょう。

【参考】

① 定めなきうき世の中と知りぬればいづくも旅の心地こそすれ（統詞花集・旅・七三五・覚法法親王）

② 暮れの秋こそ糸に月はかたぶきて嵐にまよふ有明の雲（正治初度百首・秋・六五五・慈円）

③ 思ふどち春の山辺にうちむれてそこともいはぬ旅寝してしか（古今集・春下・一二六・素性）

④ いくよろづ君をめぐまん紀の国や三つの山にも千世をそへつつ（正治初度百首・祝・一二〇一・俊成）

⑤ み熊野やいしふり川のはやくよりねがひをみつの社なりけり（忠盛集Ⅱ〈谷山茂蔵〉・神祇・八三）

【語釈】

○ 経家 一一四九～一二〇九年。藤原重家男。正三位非参議に至る。六条藤家歌人の一人。『六百番歌合』や『正治初度百首』の作者。家集『経家卿集』。『千載集』初出。当時、散位正三位、五十三歳。○ 定めなく嵐にまよふ 題字「嵐」を詠む。『維摩経』十喻を詠んだ「定めなき身はうき雲によそへつつ果てはそれにぞなりはてぬべき」

(千載集・釈教・うかべる雲のごとし・一二〇三・公任)のように、風に流される雲は「定めなし」と詠まれることが多い。①は比喩的ながら旅と関連付けた先行歌。「嵐にまよふ」も②などの先行例がある。○むら雲の群がるように集まった雲。ここまでが四句を導く序詞ともなっている。○そことも知らぬ 行く宛もないこと。「秋山のそこともえこそ聞きわかね嵐にまがふさをしかの声」(風情集・鹿音いづれの方ぞ・二〇〇)などの先行の類想歌がある。○旅寝をぞする 題字「旅」を詠み、「旅宿」の題意を満たす。四句とともに③を意識するか。明るい印象の③に対し、当該歌は旅の不安や過酷さを詠む。

○静賢 一一二四〜没年未詳。藤原通憲男。法印に至る。平治の乱に連座して配流されるが、翌年許され、後白河院の信任を得る。『治承三十六人歌合』の作者。『別雷社歌合』や建仁元年(一一二〇)八月三日の『和歌所影供歌合』などに出詠。『千載集』初出。当時、七十八歳。○願ふことみつの御山の 願い事が「満つ」(叶う)の意と「三つの御山」(熊野三山)を掛ける。「三つの御山」は④の先行例が見える程度。一方、「みつ」の掛詞は⑤や「もろ人のねがひをみつの浜風に心すずしき四手の音かな」(新古今集・神祇・一九〇四・慈円。これは琵琶湖畔の「御津」などが見える。○旅寝とや 題字「旅」を詠み、「旅宿」の題意を満たす。○嶺の嵐や 異文「嶺の嵐の」(群)。題字「嵐」を詠む。○おどろかすらん 強風が旅人の眠りを覚ますのは、願い事が叶ったことを知らせるためかと想像する。

○すこしは 底本「すみしは」。群本により校訂。「こ」を「ミ」と誤写したか。

七番

左勝

通光

13 下寝する櫓の枯れ葉を吹くあらし知らずやこれぞたのむ木のもと

右

越前

14 嵐ふくをがやが原に宿かりて我さへものを思ひ乱るる

右歌、すこし秋の歌にやあひ似て侍らん。

左歌、「知らずやこれぞ」などいへる心・姿、をかくこそ侍るめれ。左勝るべくや侍らん。

【他出】

〈左歌〉『夫木抄』（雑十八・旅・同）〔石清水三首歌合、旅宿風〕・一六九一三・四句「知らずやこれも」。

〈右歌〉なし。

【通釈】

七番

左勝

通光

13 下で眠っている櫓の枯れ葉を吹く強風。（おまえは）知らないのか、これこそが頼みとする木の根本であることを。

右

越前

14 強風の吹く萱の野原に宿を借りて、（強風に乱れる萱だけでなく）私までもが物思いに乱れているよ。

右歌は少し秋の歌に似ているでしょうか。

左歌は「知らないのか、これこそが」と詠んでいる趣向やスタイルが面白く見えます。左が勝るでしょう。

【参考】

① ゆふか^{やま}げは櫓の葉陰に宿^こかれ^こばたのむ・^こず^こゑに嵐ふくなり（隆信集・一〇五）

- ② 露しげきをがやが原のかりねには我ともぬらす夜半の袂を（正治初度百首・羈旅・七八六・忠良）
- ③ 小萱原ふきくる秋の夕風に心乱れと鶉なくなり（六百番歌合・秋・鶉・二十番左・三三九・兼宗）

【語釈】

○ 通光 一一八七～二四八年。源通親男。通具の弟。太政大臣従一位に至る。建仁元年（一一二〇）三月『通親亭影供歌合』や『千五百番歌合』に出詠。その後も順徳院・後嵯峨院歌壇で活動し、隠岐の後鳥羽院の『遠鳥歌合』の作者にもなる。『新古今集』初出。当時、従三位右中将、十五歳。 ○ 下寝する 木などの下で寝るの意。

二句以下とともに「旅宿」の題意を満たす。先行例は土の中の根を意味する「下根」が多い。「住吉の松がしたねの旅枕しぐれも風に聞きまがへつつ」（住吉社歌合^{嘉祿二年}・旅宿時雨・十四番右・七八・隆信）は「下寝」の先行例か。「忘れずは花橋に下寝して跡はむかしの夢とだにとへ」（道助法親王家五十首・夜盧橋・三六六・幸清）は後代の用例。 ○ 櫛の枯れ葉を 櫛はブナ科の落葉高木。「冬の夜を寝覚めて聞けば片岡の櫛の枯れ葉に敷ふるなり」（堀河百首・霰・九四〇・永縁）や「落ちつもる櫛の枯れ葉に吹く風は音にぞしるき冬のけしきは」（正治初度百首・冬・二〇五九・小侍従）などの先行例がある。 ○ 吹くあらし 題字「嵐」を詠む。 ○ 知らずやこれぞ「これぞ」、異文「あれぞ」（彰）、「これ□」（群）。「知らずや」は「嵐」への呼びかけと解した。 ○ たのむ木のも と「天の原くもればかなし人しれずたのむ木のもと雨ふりしより」（兼盛集Ⅰ〔書陵部本〕・七）などの先行例がある。兼実家百首中の旅歌という①が表現・内容ともに類似する先行歌。時代は下るが、『東関紀行』に理想歌が見える（補説）。

○ 越前 生没年未詳。大中臣公親女。後鳥羽院の母七条院、後鳥羽院、後鳥羽院の皇女嘉陽門院の女房。『正治後度百首』『老若五十首歌合』『千五百番歌合』などの作者。順徳天皇歌壇でも活動。その後、空白の時期があり、

『院御歌合宝曆一年』に出詠。『新古今集』初出。

○嵐ふく 題字「嵐」を詠む。

○をがやが原に 先行例は②や

「夏ふかき小萱が原の夕すずみ秋に乱るる風の音かな」(三百六十番歌合正治二年・夏・四十四番左・二三二・季経)が見える程度。「旅」の題意を満たす。

○宿かりて 題字「宿」を詠む。

○我さへものを 「をがやはら風」の

みやは乱れける夜半の露にも下折れにけり」(経正集・荇萱・三六)や後代の「たかのはら男鹿つまどふ秋風に我さへものの悲しきやなぞ」(続門葉集・秋上・二七九・義淳法師)などのように、萱に加えて「我」までもの意。

○思ひ乱るる 萱は風に乱れ、「我」は物思いに乱れると詠む。同様の趣向は「霜枯れの萱が下折れとにかくに思ひ乱れてすぐすころかな」(後拾遺集・恋三・七二九・藤原惟規)、「秋くれば思ひ乱るる荇萱の下葉や人の心なるらん」(千載集・秋上・二四二・師頼)をはじめ、③などにも見え、常套的な手法。

○すこし秋の歌にやあひ似て侍らん 萱と同じく心も乱れるという歌は前掲の『千載集』以外にも、「うづらなく狩場の小野の荇萱の思ひ乱るる秋の夕暮れ」(金葉集〈初度本〉・秋・三四〇・顕季)や「風わたる真葛が原の荇萱はうらみられてや思ひ乱るる」(正治初度百首・秋・一四四・惟明親王)のように、たしかに秋歌であることが多い。

【補説】

作者未詳の『東関紀行』に次の一節がある。左歌と類似するが、直接の影響関係は想定しにくい。

前嶋の宿を立ちて、岡部の今宿をうち過ぐるほど、片山の松の陰に立ちよりて、乾飯など取り出でたるに、嵐すさまじく梢に響きわたりて、夏のままなる旅衣、うすきたもとも寒く覚ゆ。

これぞこの頼む木のもと岡べなる松のあらしよ心して吹け

八番

左持

寂信

15 嵐ふく猪名の湊に浮寝していくたび夢を結びかぬらん

右

生蓮

16 草枕はげしき峰の嵐かなたへぬけしきにましら鳴く声

左歌、末句などよろしく聞こえ侍るを、「猪名の湊」やことに寄所なく侍らん。

右歌の「ましら」はかの「五夜之哀猿叫月」など作れるはいみじく侍れど、歌には強ひて好み詠むべきことには侍らぬにや。左右なずらへて持と申すべくや。

【他出】 左右ともなし。

【通釈】

八番

左持

寂信

15 強風の吹く猪名の湊に浮いている（舟の）中で寝て、何度、夢を見かねているのだろうか。

右

生蓮

16 草を結んだ枕に激しい山頂の強風が吹くよ。堪えられない様子で猿の鳴く声。

左歌は下句などが素晴らしく聞こえますが、「猪名の湊」は特に詠むべき根拠がないでしょう。

右歌の「猿」はあの「夜明け間近の月に猿が悲しげに叫ぶ」などと作っているのはたいそう立派ですが、和歌には強いて好んで詠むべきことではないでしょう。左右、差し引いて持と申すべきか。

【参考】

①浮寝する猪名の湊に聞こゆなり鹿の音おろす嶺の松風（千載集・秋下・夜泊鹿・三二三・藤原隆信）
 ②あらし吹く夜半の川波たかければ浮寝の鴛も夢さめにけり

（金葉集〈橋本公夏筆本拾遺〉・冬・水鳥・六四・源家時）

③秋はてて嵐にたへぬ木の葉猿こずえをつたふ声のみぞする（為忠家初度百首・梢猿・六六九・俊成）

④瑤台霜満一声之玄鶴唳天、巴峽秋深五夜之哀猿叫月（和漢朗詠集・猿・四五四・清賦）

【語釈】

○寂信 藤原惟方。一一二五―一二〇二年以降。顕頼男。参議従三位に至る。平治の乱後、後白河院と対立し、永

暦元年（一一六〇）長門国へ配流された際に出家。仁安元年（一一六六）召還。『治承三十六人歌合』に入る。『石

清水若宮歌合正治二年』『和歌所影供歌合建仁元年八月』などに出詠。家集『粟田口別当入道集』。『千載集』初出。当時、

七十七歳。○嵐フネトムルマデふく 題字「嵐」を詠む。○猪名の湊オホツツミに 摂津国の歌枕。「大海尔オホツツミ 荒莫吹アラシナフキ 四長鳥

居名之湖尔フネトムルマデ 舟泊左右手」（万葉集・卷七・雑歌・羈旅作・一一八九）は西本願寺本の訓では二句「アラシナフキ

ソ」、四句「フネノミナトニ」、五句「フネハツルマデ」となっている。①は『歌仙落書』などの数々の秀歌撰にも

入る著名歌。○浮寝して 先行の類想歌に②などがある。「旅宿」の題意を満たす。○いくたび夢を結びかぬ

らん 夢を結びかぬるといふ先行例は少なく、後代に「音たてぬ花たちばなのにほひにも結びかぬたるうたたねの

夢」（楳葉集・夏・盧橘・一五六・法橋章信）などが見える。

○生蓮 源師光。一一三一頃―一二〇三年以降。師頼男。藤原頼長猶子。具親・宮内卿の父。正五位下に至る。建

久六年（一一九五）以前に出家。歌合や歌会などを主催し、私撰集をも編纂した（散佚）。『中宮亮重家朝臣家歌

合』をはじめ、『御室五十首』『正治初度百首』などの作者にもなり、『千五百番歌合』では判者を務めた。『歌仙落書』や『治承三十六人歌合』にも撰ばれる。『千載集』初出。家集『師光集』。当時、七十歳ほどか。○草枕「旅宿」の題意を満たす。○はげしき峰の 先行例に「木枯らしの激しき嶺のもみち葉は散る音高く聞こゆなるかな」（京極大殿御集・落葉有声・二）がある。○嵐かな 題字「嵐」を詠む。○たへぬけしきに 底本「たえぬ」。異文「たえぬ」（彰）、「絶ぬ」（群）。③は強風に堪えきれず散る木の葉から「木の葉猿」へと転換する。猿も強風に堪えがたいことが重ねられていよう。また「かくばかり色に出でじと忍べども見ゆらむものをたへぬけしきは」（千載集・恋一・六八三・賢智法師）、「さらぬだに老いては物のかなしきに夕のましら声な聞かせそ」（永久百首・猿・七〇一・大進）、「嵐ふく嶺のましらの鳴く声にあはれもよほす滝つ音かな」（正治初度百首・山家・二〇九一・小侍従）などを参考に「堪へぬ」と解す。「絶えぬ」であれば「絶え間ない様子で」の意になる。こちらも通意であろう。○ましら鳴く声 同じ先行例は見えない。異文「ましら鳴くなり」（彰）は先行例多数。○「猪名の湊」やことに寄所なく侍らん 「寄所」はその言葉を詠む根拠。①は「猪名」の枕詞「しながどり」が「鹿」に関わるという『俊頼髓脳』などの説を「寄所」として「猪名」と「鹿」を取り合わせるか。○「五夜之哀猿叫月」など作れるは ④を指す。これは「瑤台に霜が満ち、二千年を経て黒くなった鶴が天に一声鳴く。巴峽は秋が深まり、夜明け間近の月に猿が悲しげに叫ぶ」の意。なお、隆房（七番歌参照）の『朗詠百首』に「巴峽秋深五夜之哀猿叫月」を題として「月の入る片山かげに鳴く猿は更けゆく秋をものがなしとや」（二八）と詠まれる。○歌には強ひて好み詠むべきことには侍らぬにや 判者は「ましら」を歌に詠むことを難するが、前掲のような例が散見する。院政期以降やや流行の感があり、それを誠める意味もあったか。

九番

左

枳阿

17 山路ゆく仮の庵をとふ嵐なれをぞたのむ旅の友とは

右勝

中納言

18 おどろかす関のとだちの嵐かな夢も結ばぬ旅のまろねは

右歌、「関のとだち」ぞ「狩場の小野」などにやとおぼつかなく侍れど、左歌、「なれをぞ」などいへる、よろしからず。右勝にてや侍りなん。

【他出】

〈左歌〉『夫木抄』（雑十八・旅・同）〔石清水三首歌合、旅宿嵐〕・一六九一四。

〈右歌〉なし。

【通釈】

九番

左

枳阿

17 山道をゆく途中の仮の庵を尋ねてくる強風。おまえをこそ頼みとするよ、旅の友として。

右勝

中納言

18 眼りを覚ます、関所の鳥たちがいつせいに飛び立つほどの強風であるよ。夢も見ない旅のごろ寝は。

右歌の「関所の鳥たちがいつせいに飛び立つ」は「狩場の小野」など（に普通は詠むの）ではとはっきりしませんが、左歌の「おまえをこそ」などと詠んでいるのは良くない。きつと右の勝でしょう。

【参考】

- ① 山ふかみ松の嵐のほかにまた宿とふものはさをしかの声（俊成五社百首・伊勢・鹿・四五）
- ② 郭公なれをぞたのむ村雨のふるさと人はとひもこぬ夜に（松浦宮物語・氏忠／風葉集・夏・一七六）
- ③ 吹きまよふ嵐とともに旅寝する涙の床に木の葉もるなり（散木奇歌集（書陵部蔵）・旅宿落葉・五八八）
- ④ 吾妹^{ワガイモ}児^コ之^ガ 阿乎^{アハシ}徳^{シノ}良^{ラウ}志^シ 草枕^{クサマくら} 旅^{タビ}之^ノ丸^マ寐^{マロネ}尔^ニ 下^{シタ}紐^{ヒモ}解^{トキ}（万葉集・卷十二・羈旅発思・三一四五）

【語釈】

○釈阿 藤原俊成。一一一四〜一二〇四年。俊忠男。定家の父、俊成卿女の祖父。正三位皇太后宮大夫に至る。安元二年（一一七六）出家。「久安百首」などの作者。「六百番歌合」など多くの歌合の判者を務める。「千載集」撰者。歌論書『古来風体抄』『万葉集時代考』など。家集『長秋詠藻』『俊成家集』など。「詞花集」初出。当時、八十八歳。○山路ゆく「旅」の題意を満たす。○仮の庵を「宿」の題意を満たす。先行例に「秋の田のかりの庵に雨ふりて衣手ぬれぬほす人なしに」（家持集（西本願寺蔵「三十六人集」・一八八）があり、同時代に「明け方になるや白露かずそひぬ仮の庵の葦のすだれに」（秋篠月清集・旅・一四六六）がある。○とふ嵐 題字「嵐」を詠む。俊成自身が文治六年（一一九〇）に詠んだ①や「枕にも袖にも涙つららめて結ばぬ夢をとふ嵐かな」（後京極殿御自歌合^{建久九年}・冬・五十一番右・一〇二）、「冬くれば谷の小川の音絶えて峯の嵐ぞ窓をとひける」（式子内親王集・前小斎院御百首・冬・六〇）などに早く見える。当該歌合二六番歌にも。○なれをぞたのむ「なれをぞ」、底本「なきをぞ」。群本・判詞・他出により校訂。先行例は『万葉集』の長歌が、同時代には②が見える程度。②は俊成男の定家作で、当該歌合の前年にあたる正治二年（一一二〇）までの成立と見られる。なお、後世に「尾花とも萩ともいはじ女郎花なれをぞ秋のあはれとは見る」（柳葉集・弘長二年十二月百首哥・女郎花・

三二二)がある。「嵐」を「頼む」という先行例には「しばしこそ頼む心もおぼえけれ聞きなれにけり嶺の嵐も」(正治初度百首・山家・一七九三・師光)がある。○旅の友とは 先行例はない。厭わしいはずの「嵐」を唯一の「友」と詠んで、旅の不安や孤独を強調する。③などが類似する。

○中納言 俊成女の健御前か。一一五七―一二一九年以降。建春門院、八条院らに仕えた。歌合や定数歌への目立った出詠はない。日記『たまきはる』。『玉葉集』初出。当時四十五歳。○おどろかす 目を覚ます。「とだち」により眠りが妨げられると詠む。○関のとだちの 「とだち」は「鳥立」と書き、鷹狩などの際に獲物の鳥が飛び立つこと。ここは単に鳥が飛び立つ意であろうが、判詞に指摘されるとおり、「関」と結び付ける例は見えない。

○嵐かな 題字「嵐」を詠む。○夢も結ばぬ 夢を見るほど熟睡もできないの意。光源氏が明石入道に詠んだ「旅衣うらがなしさにあかしかね草の枕は夢も結ばず」(源氏物語・明石・二二三)などの先行例がある。○旅のまるねは 「まるねは」、異文「まるねを」(鶴・彰・群)。「まる寝」は着物を着たまま横になること。「旅宿」の題意を満たす。④のほかにも「とへかしなさゆる霜夜に思ひかね袖おりかへす旅の丸寝を」(堀河百首・旅恋・一二二六・藤原顕仲)などの先行例がある。

○「関のとだち」ぞ「狩場の小野」などによ 「とだち」は「関」ではなく「狩場の小野」などとともに詠むのが通例だとの非難。実際、「あはれなる狩場の小野のとだちかな思へばこれや罪の通ひ路」(正治初度百首・冬・六七〇・慈円)や「みかりする狩場の小野に風さえてとだちの柴に霰ふるなり」(後鳥羽院御集・詠五百首和詞・冬・八九四)などの例が見える。○「なれをぞ」などいへる、よろしからず 前述のように「なれをぞ」は先行例に乏しく、それを非難するか。○侍りなん 底本「侍なん」、異文「侍るらん」(彰)、「侍らなむ」(群)。他の歌合判詞などの用例を参考に「侍りなん」と読む。

十番

左勝

俊成卿女

19まどろまぬうつつともなき旅寝して嵐にたゆる故郷の夢

右

寂蓮

20面影は都ながらのうたたねに松風ぞふく佐夜の中山

左歌、心・姿よろしく待るにや。

右歌、ただ「嵐」とぞあらまほしく待るを、「松風ぞふく佐夜の中山」といへる、強ひて傍題の「松」、さらだもや待るべからん。よりにて左勝つべきにや侍らん。

【他出】

〈左歌〉なし。

〈右歌〉『夫木抄』（雑二・さやの中山、遠江・石清水三首歌合、旅宿風(たぐ)）。

【通釈】

十番

左勝

俊成卿女

19まどろんでもいない、しつかり目覚めてもない旅寝をして、強風に途切れる故郷の夢。

右

寂蓮

20面影は都で見たとおりに浮かぶうたた寝（の夢）に、松風が吹く佐夜の中山。

左歌は趣向やスタイルが素晴らしいでしょう。

建仁元年『石清水社歌合』注釈

右歌はただ「嵐」とありたいところですが、「松風が吹く佐夜の中山」と詠んでいるのは、あえて傍題の「松」(を詠んでいるが)、そうでなくてもあるべきでしょう。よって左が勝つべきでしょう。

【参考】

いと忍びてまかりありきて

(よみ人しらず)

①まどろまぬものからうたてしかすがにうつつにもあらぬ心地のみする(八七七)

返し

うつつにもあらぬ心は夢なれや見てもはかなき物を思へば(八七八)(後撰集・恋四)

②面影のひかふる方にかへりみる都の山は月織くして(拾遺愚草・百廿八首和譚・旅・一七二三)

鞍馬より出で侍りける人の、月のいとをかしかりければ、鞍馬の山もかくこそなど思ひ出でけるを聞きて

齋院中務

すみなるる都の月のさやけきになにか鞍馬の山は恋しき(八五〇)

かへし

齋院中将

③もろとも山に端いでし月なれば都ながらも忘れやはする(八五一)(後拾遺集・雜一)

④故郷のけふの面影さそひこと月にぞ契るさよの中山(老若五十首歌合・雜・二百四十二番右・四八四・雅経)

⑤秋の露^月さやの中山さやかに故郷人ぞ面影にたつ(玉吟集・百首和歌 大僧正四季百首・旅・八八〇)

【語釈】

○俊成卿女 一一七一頃〜一二五一以降。藤原盛頼女。盛頼が鹿ヶ谷の変に連座したため、祖父俊成に養育される。定家の姪。通具の妻。建仁元年(一一二〇)通具が按察局と婚姻したのを機に、後鳥羽院に出仕。『仙洞句題

五十首』『千五百番歌合』などの作者。『新古今集』には現存女流歌人としては最多の二十九首が入集。順徳天皇歌壇などでも活躍。著作『越部禪尼消息』。家集『俊成卿女集』。『新古今集』初出。当時、三十歳ほどか。○まどろまぬうつつともなき ①に基づくか。眠っても起きてもない状態を詠み、ただでさえはかない夢をさらに「嵐」が覚ます趣向。「逢ふ事はうつつともなほおほえねどまだこれほどの夢は見ざりき」（正治初度百首・恋・一〇八二・経家）などの類想歌がある。○旅寝して「旅宿」の題意を満たす。○嵐にたゆる 題字「嵐」を詠む。「嵐」で夢が絶える趣向は、後に「雪にしく袖よ夢路よたえぬべしまだ白川の関のあらしに」（最勝四天王院障子和歌・白川関^{陸奥}・四〇一・後鳥羽院）、「夢だにも嵐にたえぬ山里の柴の枯れ葉に霰ふるなり」（道家百首・冬・六五）などと詠まれる。○故郷の夢 「草枕まだおとづれのなきままに波におどろく故郷の夢」（秋篠月清集・冬・一三〇六）は『拾玉集』五二八番歌の詞書によると建久元年（一一九〇）の作。良経は「かりそめの憂き世いでたる草の庵に残る心は故郷の夢」（秋篠月清集・雑・山家の心を・一五二〇）とも詠む。

○寂蓮 藤原定長。生年未詳〜一二〇二年七月二十日以前。俊海男。俊成の養子。従五位上中務少輔に至る。承安二年（一一七二）頃出家。嘉応二年（一一七〇）『住吉社歌合』をはじめ、数々の歌合や歌会に出詠。慈円や良経と交流があった。後鳥羽院歌壇でも活躍し、『新古今集』の撰者にも任命されるが、完成前に没。家集『寂蓮集』など。『千載集』初出。当時、六十代前半か。○面影は 恋人の面影。②のほか、『伊勢物語』第九段を踏まえた「思ひ出づる人や都になかるらんこととふ月にそはぬ面影」（正治初度百首・羈旅・二二八三・中納言得業信広）などの先行例がある。○都ながらの ③に見える句。都のままと詠むことで、都以外にすることを暗示し、五句とともに「旅」の題意を満たす。同時期に「吉野山みやこながらぞ入りける面影にたつ花のたよりは」（千五百番歌合・春二・百五十番左・二九九・顕昭）の作がある。○うたたねに 「宿」の題意を満たす。○松風ぞふく

「松風」により「嵐」の題意を満たそうとするが、判詞で非難される。「佐夜の中山」との取り合わせは「岩がねの枕におつる松風の夢路たえぬるさよの中山」（正治初度百首・羈旅・二一八四・丹後）などの先行例がある。後代には「現にも頼めぬ人の面影に名のみは吹かぬ庭の松風」（後鳥羽院自歌合・九番右・待恋・一八）などの作がある。恋人が「都」で「待つ」の意を響かせるか。○佐夜の中山 遠江国の歌枕。東海道の難所のひとつ。『古今集』では「さや」と詠まれたが、院政期ころから「さよ」も増える。「面影」と取り合わせた先行例に④、同時代詠に⑤がある。

○ただ「嵐」とぞあらまほしく侍るを 「嵐」はそのまま「風」と詠むべきだとの主張。○強ひて傍題の「松」、さらでもや 「さらでもや」、異文「さしてもや」（群）。当該歌合では「社頭松」題も出されており、「松風」と詠むと傍題をおかす。「強ひて」を受ける言葉がないが、無理に傍題をおかしてまで「松（風）」と詠む必然性がないとの主張。『別雷社歌合』の「いつしかと焼きてし野辺の霞をばまた思ひたつ煙とぞ見る」（霞・廿二番左・四三・定宗）に対し、判者俊成は「心・姿をかきさやうに侍るを、また思ひたつ煙、さらでもやきこゆ」と非難する。

十一番

左勝

隆信

21 草むすぶ床は夜な夜な変はれども変はらぬ嶺の嵐をぞ聞く

右

保季

22 露ふれし秋はむかしの草まくら嵐にたへぬ涙ばかりぞ

左歌、「変はらぬ嶺の嵐をぞ聞く」、よろしく聞こえ侍り。

右歌、姿はいと優に待るを、「秋はむかしの」といへるや餘りにやさしく聞こえ侍らん。左勝るべくや。

【他出】 左右ともなし。

【通釈】

十一番

左勝

隆信

21草を結ぶ旅の寢床は夜ごとに変わるけれども、変わらない山頂の強風を聞くことだ。

右

保季

22露の触れた秋はもはや昔の草の枕。(いまは)強風に堪えられない涙だけであるよ。

左歌は「変わらない山頂の強風を聞くことだ」が素晴らしく聞こえます。

右歌はスタイルはたいそう優美ですが、「秋はもはや昔の」と詠んでいるのはあまりにも優美すぎるように聞こえるでしょう。左が勝るべきか。

【参考】

①夜な夜なに枕に慣れし笛竹もいかなる床にふしかはるらむ(六百番歌合・寄笛恋・一番右・一〇八二・家隆)

②思ひこし因幡の山の嶺にしも頼めぬ松の風をぞきく(老若五十首歌合・雑・二百四十五番右・四九〇・宮内卿)

③露ふれし葉末は霜になりにけり秋より冬の小野の篠原

(千五百番歌合・冬一・八百八十二番左・一七六一・保季)

【語釈】

○隆信 一一四二〜一二〇五年。藤原為経男。母は美福門院加賀で、後に俊成と再婚して定家らを産む。正四位下

に至る。『六百番歌合』『御室五十首』『正治初度百首』『千五百番歌合』などの作者。似絵も得意とした。著作『うきなみ』『弥世継』。家集『隆信集』（二種）。『千載集』初出。当時、散位正四位下、六十歳。○草むすぶ 二句とともに「旅宿」の題意を満たす。

○床は夜な夜な変はれども 類似の表現を用いた先行例に①が、同時期の例に「一筋に慣れなばさてもすぎの庵に夜な夜な変はる風の音かな」（千五百番歌合・雑一・千四百十七番石・二八三五・通具）がある。なお、後世に「結びおく宿こそかはれ草枕かりねは同じ夜な夜なの露」（玉葉集・旅・一一六一・実重）、「結びすてて夜な夜な変はる旅枕かりねの夢の跡もはかなし」（風雅集・旅・九五八・為兼）などの類想歌がある。○変はらぬ嶺の嵐をぞ聞く 題字「嵐」を詠む。詠作年未詳の「そのままに松の嵐も変はらぬを忘れやしぬる更けし夜の月」（新古今集・恋四・一一八〇・法眼宗円）が「嵐」を変わらないものと詠む。五句は先行する②や「夜をさむみ志賀の浦浪水みて長良の山に嵐をぞきく」（正治後度百首・氷・一〇四四・康業〈慈円〉）のほか、「猪名山の道のささ原うづもれて落ち葉が上に嵐をぞきく」（秋篠月清集・南海漁父百首・冬・五四一）、「あしびきの山の道柴ふみわけてまだ聞きなれぬ嵐をぞきく」（後鳥羽院御集・承元二年二月内宮卅首御歌・秋・一三六三）などの同時代の例がある。二番歌にも。

○保季 一一七一〜没年未詳。藤原重家男。叔父季経の猶子。従三位に至る。建久六年（一一九五）『民部卿家歌合』をはじめ、『千五百番歌合』などに出詠。『新古今集』初出。当時、散位従四位上、三十一歳。○露ふれし 保季は同時期に③を詠み、判者定家は「左の初五字、いかに置きいかに消ゆる露を「触るる」とは申すべきにか。いまだ思ひえ侍らねばわきまへ申しがたくや」と批判する。ただし、「宮木野の小萩が枝に露ふれて虫の音むすぶ秋の夕風」（後鳥羽院御集・同〔正治二年（一一二〇）〕八月一日新宮歌合・野辺虫・一四八三）の例も見える。○秋はむかしの 先行例に「大井河秋は昔のおなじ色の心にかぶ三つの船かな」（正治後度百首・あそび・

八八八・宮内卿) などがある。「露」は秋の景物。その露が触れた秋も今は昔のことと回想する趣向。○草まく

ら「旅宿」の題意を満たす。○嵐にたへぬ 底本「たえぬ」(鶴・彰・群)。題字「嵐」を詠

む。「年ふれどあはれに堪へぬ涙かな恋しき人のかからましかば」(千載集・恋五・九三九・顕輔)や「行くと来とせきとめがたき涙をや絶えぬ清水と人は見るらむ」(源氏物語・閨屋・二七一・空蟬)のように、「堪へぬ」「絶えぬ」どちらも通意。「時雨かと寝覚めの床に聞こゆるは嵐にたえぬ木の葉なりけり」(山家集・暁落葉・四九六)なども両様に解せるであろう。「堪へぬ」と解したが、「絶えぬ」ならば「嵐に絶えることのない(涙)」の意。

○涙ばかりぞ この句を五句に用いる先行例はない。

○餘りにやさしく聞こえ侍らん 「やさし」は肯定的に使うのが一般的。「艶」や「優」に類する評語で、優美なさまを表す。秋は毎年めぐってくるにもかかわらず、「秋はむかし」と詠むのは誇張しすぎとの難か。

十二番

左勝

有家

23岩が根の床に嵐を片敷きてひとりや寝なん佐夜の中山

右

長明

24苔むしろ雲にかさぬる夜半の袖ぬぎわかるるは嶺の松風

左、「ひとりや寝なん佐夜の中山」といへる、よろしく聞こえ侍るべし。

【他出】

〈左歌〉『新古今集』(羈旅・石清水歌合に、旅宿嵐といふ事を・九六二・五句「さよの中山」)。

『自讃歌』（一〇八・五句「さよの中山」）。『新三十六人撰正元二年』（二八八）。

『歌枕名寄』（東海三・遠江国・佐夜中山・五〇〇八）。

〈右歌〉『夫木抄』（雑十八・旅・同〔石清水三首歌合、旅宿嵐〕・一六九一五）。

【通釈】

十二番

左勝

有家

23大地に根を張ったような岩の寝床に強風ばかりを敷いて、きつとひとりで寝るのだろう、佐夜の中山に。

右

長明

24苔の筵の上で雲に重ねる夜中の袖。それを脱いで後朝に別れるのは山頂の松風。

左、「きつとひとりで寝るのだろう、佐夜の中山に」と詠んでいるのは素晴らしく聞こえるでしょう。

【参考】

①岩がねの枕におつる松風の夢路たえぬるさよの中山（正治初度百首・羈旅・二二八四・丹後）

②嵐ふく高嶺の雲を片敷きて夢路もとほし宇津の山越え

（正治初度百首・羈旅・七八四・忠良／三百六十番歌合・冬・卅二番左・四九五）

③君こずはひとりや寝なむ笹の葉の深山もそよにさやぐ霜夜を

（久安百首・冬・九五四・清輔／新古今集・冬・六一六）

④七夕の待ちこし秋は夜寒にて雲にかさぬる天の羽衣（正治初度百首・秋・四四〇・良経）

【語釈】

○有家 一一五五～一二一六年。藤原重家男。経家の弟。従三位大藏卿に至る。『六百番歌合』『千五百番歌合』

『水無瀬殿恋十五首歌合』などに出詠。『新古今集』撰者の一人。『千載集』初出。当時、散位正四位下、四十七歳。

○岩が根の床に 「岩が根」と「嵐」の取り合わせは後代の「岩がねの枕はさしもなれにしに何おどろかす松の嵐ぞ」（土御門院御集・寄山述懐・七）、承久元年（一二一九）ころの内裏歌合の作という「今日さへや夕越えかねて

岩が根の嶺のあらしにあまたたび寝ん」（玉吟集・山晚風・二六七二）などに見える。「岩が根の床」の先行例はないが、「枕」は①があり、後代にも前掲の土御門院歌などがある。○嵐を片敷きて 「片敷く」ものは衣や葉

（二・五番歌参照）が通例で、「嵐」を詠む先行例はない。ただし、②のように「雲」を片敷くという例があり、これに触発されたか。『院御歌合宝治元年』「旅宿嵐」題の「あしびきの山の嵐を片敷きてならはぬ岩の枕をぞする」

（百十一番左・二二二・通成）は判者為家に「左、嵐を片敷くといひ、右、吹く嵐かなと果てたる、ともに好み詠ずべき姿・詞に侍らねど」と難ぜられる。○ひとりや寝なん 先行例は有家の伯父の詠んだ③が見える程度。

○佐夜の中山 遠江国の歌枕（二〇番歌参照）。

○長明 生年未詳～一二一六年。鴨長継男。従五位下に至る。俊恵の歌林苑に出入りし、『正治後度百首』『三体和歌』などを詠進。和歌所寄人となる。その後、河合社禰宜の地位を得られず隠棲。著作『方丈記』『発心集』。歌論書『無名抄』。家集『鴨長明集』。『千載集』初出。当時、散位従五位下、四十代後半か。○苔むしろ 苔が敷き

詰め、筵のように見える状態。「三芳野之ミヨシノ 青根我峰之アヲネガミネ 蘿席ワロシロ 誰將織タレヲスナシニ 経緯無二」（万葉集・卷七・雑歌・詠蘿・一一二〇）が著名で、影響歌が「堀河百首」などに見える。○雲にかさぬる 恋人と寝る場合は互いの袖・衣を

重ねるが、旅の独り寝では自分の袖を雲に重ねると詠んだ。④は「七夕」の「天の羽衣」というあくまでも想像上

の世界を描くが、当該歌は現実に引き寄せた比喩となっている。○夜半の袖 院政期ころから詠まれる。「さも

こそは草の枕と言ひおかめ露けかりつる夜半の袖かな」(久安百首・羈旅・一二九六・待賢門院安芸)は旅と関連付けた先行歌。同時代にも「夏と秋と行きかふ空やふけぬらんやや露おもる夜半の袖かな」(後鳥羽院御集・建仁元年三月内宮御百首・夏・二三五)が見える。二句とともに「旅宿」の題意を満たす。○ぬぎわかるるは「な

でしこの花色衣ぬぎわかれ誰が朝露の宿かうつらん」(玉吟集・夏・一九〇八)、「忘れめや形見の衣ぬぎわかれ帰るあしたに残る月影」(如願法師集・春日詠百首応製和詞・恋・七六)のように、後朝の男女の別れに詠むのが一般的。当該歌はそれを前提に、旅の独り寝のわびしさを詠む。○嶺の松風 「松風」により「風」の題意を満た

そうとするか。二〇番歌で非難されていた。先行する「風ふけば峰にわかるる白雲のたえてつれなき君が心か」(古今集・恋二・六〇一・忠岑)や後代の「行衛なき逢ふをかぎりの白雲のたえてわかるる嶺の秋風」(洞院撰政家百首・不遇恋・一一七六・俊成卿女)のように、松風に吹かれた雲が嶺に別れる(分かれる)ことを恋人との別れに重ねるか。

十三番

左勝

定家

25古郷にさらば吹きこせ嶺のあらし仮寝の山の夢はさめぬと

右

雅経

26あづまぢや佐夜の中山夢路たえ雲にふす夜をとふ嵐かな

右歌、「佐夜の中山夢路たえ」などいへる姿、をかしく侍れど、左歌、「さらば吹きこせ嶺のあらし」といへ

る、なほよろしかるべくや侍らん。

【他出】

〔左歌〕『拾遺愚草』（雜・旅・建仁元年十二月八幡歌合、旅宿嵐・二六八五）。

『玉葉集』（旅・建仁元年八幡宮歌合、旅宿嵐・一二〇七・四句「仮寝の夜半の」）。

〔右歌〕なし。

【通釈】

十三番

左勝

定家

25故郷にそれならば吹いて来い、山頂の強風よ。仮の旅寝をしている山の夢は覚めてしまったと。

右

雅経

26東への道よ、佐夜の中山に夢は覚め、雲に横たわる夜を尋ねてくる強風であるよ。

右歌は「佐夜の中山に夢は覚め」など詠んでいるスタイルは面白いですが、左歌は「それならば吹いて来い、

山頂の強風よ」と詠んでいるのが、さらに素晴らしいのではないのでしょうか。

【参考】

①岩が根の枕におつる松風の夢路たえぬるさよの中山（正治初度百首・羈旅・二一八四・丹後）

②月影はくまなきものを尋ねゆく人はいづれの雲にふすらん（出観集・月下問僧・四一七）

【語釈】

○定家 一一六二～一二四一年。藤原俊成男。正二位権中納言に至る。『別雷社歌合』への出詠以降、『六百番歌

「合」など多くの歌合や歌会に参加する。後鳥羽院歌壇では俊成の奏状により『正治初度百首』の作者に追加され、才能を認められる。西行の『宮河歌合』の判者、後鳥羽院の『院当座歌合』正治二年十月の衆議判の執筆、『千五百番歌合』の判者の一人。当該歌合以降も後堀河院の時代に至るまで活躍。『新古今集』撰者の一人。『新勅撰集』の撰者。また『古今集』や『源氏物語』など多くの古典をも書写。家集『拾遺愚草』。歌論書『詠歌大概』など。日記『明月記』。『千載集』初出。当時、正四位下左近権少将・安芸権介、四十歳。○古郷にさらば吹きこせ 「さらば」は下旬の内容を指し、「仮寝の夢を覚ました強風ならば、そのまま故郷まで自分の消息を知らせよ」の意。定家は翌年にも「須磨の浦や藻塩の枕とふ螢かりねの夢路わぶとこたへよ」(水無瀬殿釣殿当座六首歌合・海辺見螢・二番左・三)と詠み、『拾遺愚草』(二二二七)では五句「わぶとつけこせ」となっている。これは「ゆく螢雲のうへまでいぬべくは秋風ふくと雁につげこせ」(後撰集・秋上・二五二・業平／伊勢物語・第四十五段)を踏まえており、当該歌もその影響下にあるか。また、定家は「藻塩たれ嘆きをすまの道かへて憂き世ふきこせ関の浦風」(拾遺愚草・なき人の名をほのぼのととりて、卒都婆供養すとて人の勧めし歌・在原中納言・二九六七)とも詠む。なお、「ふきこせ」の同時代の例としては「住吉の神もあはれといへの風なほもふきこせ和歌の浦波」(源家長日記・三二)が見える。これは定家が息子為家を後鳥羽院に謁見させた際に賜った歌で、『明月記』によると建仁三年(一一〇三)三月一日のこと。○嶺のあらし 題字「嵐」を詠む。○仮寝の山の「旅宿」の題意を満たす。

○夢はさめぬと 意味的には二句の「吹きこせ」にかかる。従来は「あふと見る夢さめぬればつらきかな旅寝の床にかよふ松風」(忠度百首・寄源氏恋・七六)のように、風や嵐は都の夢を覚ます厭わしいものとしてばかり詠まれていた。当該歌のように風が都と旅人をつなぐという発想の先行歌は見出せない。定家は翌年にも「袖に吹けさぞな旅寝の夢も見じ思ふ方よりかよふ浦風」(三体和歌・二四)と詠み、当該歌とは対照的に都からの風が吹けば

旅寝の夢も見ると詠む。

○雅経 一一七〇～一二二一年。藤原頼経男。父が伊豆に配流された後、鎌倉に下向。蹴鞠の才能により後鳥羽院に召還され、参議従三位に至る。『正治後度百首』や『老若五十首歌合』、『千五百番歌合』などに出詠。『新古今集』撰者の一人。順徳天皇歌壇でも活躍。家集『明日香井集』。著作『革刎別記』『蹴鞠略記』。『新古今集』初出。当時、従五位上左近権少将・越前介、三十二歳。○あづまぢや 同じ表現は「東路やしねばさかひに宿りして雲るに見ゆる筑波山かな」(堀河百首・山・一三七〇・藤原顕仲。橋本不美男・滝沢貞夫『校本堀河院御時百首和歌とその研究 本文・研究編』(笠間書院、一九七六年)によると、二句は「いればさかひに」とする本が多い)などに早く見える。雅経は後に「あづまぢや都しのぶのうらみてもならはぬ波にかこつ袖かな」(明日香井集・詠千日影供百首和歌・旅・四三七)なども詠む。○佐夜の中山 遠江国の歌枕。二〇番歌参照。○夢路たえ ①は「佐夜の中山」と取り合わせた先行歌。雅経は当該歌合が開催されたのと同じ建仁元年(一一二〇)の「仙洞歌合」においても「ながめわび夢路たえぬる宇津の山月もうらめし有明の空」(明日香井集・鞆中暁恋・一〇八一)と詠む。○雲にふす夜を 二句などとともに「旅宿」の題意を満たす。類想の先行歌に②などがある。雅経は同時期に「雲にふし嵐に宿るあしびきの山のいくへの夕暮れの空」(千五百番歌合・雑・千三百九十一番石・二七八三)とも詠む。また「雲にふす人の心ぞ知られぬる今日をはつせの奥の山ふみ」(秋篠月清集・二夜百首・仏寺・一八七)などの同時代詠もある。○とふ嵐かな 題字「嵐」を詠む。当該歌合の直前に詠まれた「山深み人目絶えたる夕暮れの真木の板戸をとふ嵐かな」(如願法師集・建仁元年十二月二日、影供御哥合・山家夕嵐・八三五)などがある。一七番歌参照。

十四番

左勝

具親

27 草枕おのればかりのなき名にて結ばぬ夢にあらし吹くなり

右

道清

28 萱枕かりそめぶしのさびしきに夜半のあらしぞ友となりける

右の「萱枕」無為には侍るを、左の「結ばぬ夢に」といへる、をかしく見え侍るにや。

【他出】

〈左歌〉なし。

〈右歌〉『夫木抄』（雑十四・萱枕・石清水三首歌合、旅宿風^{マモ}・一五三九八）。

【通釈】

十四番

左勝

具親

27 草の枕は（「結ぶ」ものというが）自分だけの名ばかりで、結ぶこともない夢に強風が吹くのが聞こえる。

右

道清

28 萱の枕に飯の旅寝をする寂しさに、夜中の強風が友となったことだ。

右の「萱の枕」は無難ではありませんが、左の「結ぶこともない夢に」と詠んでいるのは面白く見えるでしょう。

【参考】

① 枕にも袖にも涙つららみて結ばぬ夢をとふ嵐かな（後京極殿御自歌合建久九年・冬・五十一番石・一〇二）

② 旅寝する夢の中にも散る花のさむる枕にあらしふくなり（御室五十首・春・五五五・家隆）

③ 秋風に心乱るる旅寝かなゆひとめられぬ萱枕して（夫木抄・雑十四・萱枕・家集、旅歌・一五三九七・源仲正）

【語釈】

○具親 生没年未詳。源師光男。従四位下左将に至る。後鳥羽院に見出され、『正治後度百首』『千五百番歌合』などに出詠。弘長二年（一一二二）の『三十六人大歌合』が最後の事績。『新古今集』初出。当時、従五位下左兵衛佐。○草枕 「旅宿」の題意を満たす。○おのればかりの 後代に「夏草の深き思ひもあるものをおのれば

かり」とふ蚩かな」（土御門院御集（他本による増補）・夏・二八六）などがある。ここでは「草枕」のことを「おのれ」というか。類似の先行例は見えない。○なき名にて 「にて」、異文「まで」（群）。「なき名」は根拠のない噂。通常は恋愛に関して詠む。ここでは「草枕」といえば「結ぶ」ものなのに、「夢」は「結ばず」「なき名」であるとの趣向か。○結ばぬ夢にあらし吹くなり 題字「嵐」を詠む。表現は①や②の先行歌に似る。

○道清 『群書類従』所収『石清水祠官系図』は建永元年（一一二〇六）に「卅一」で入滅とし、安元二年（一一七六）生となる。しかし、同系図には治承二年（一一七八）に「権上座」に補されたとも記され、『廿二番歌合治承二年』にも出詠しているため、「卅一」の誤写で、永万二年（一一六六）生か。慶清男。石清水社別当、法印権大僧都に至る。『石清水若宮歌合正治二年』『石清水若宮歌合元久元年』に出詠。『石清水若宮歌合正治二年』は道清の「結構」。『新勅撰集』に入集。○萱枕 萱を結んだ枕の意であろうが、用例は③程度しか見出せない。二句とともに「旅宿」の

題意を満たす。○かりそめぶしの 「仮初め」に「萱」にちなむ「刈り」を響かせるか。後世、「独り寝しかりそ

めぶしの萱むしろ今は涙を重ねてぞ敷く」(光明峰寺撰政治家歌合・寄筵恋・八十五番右・一六九・中宮但馬)などの例がある。○夜半のあらしぞ 題字「嵐」を詠む。○友となりける 「嵐」を「友」とする先行例は見出せない。同時代に「慣れぬ間ぞひさしくもある深山べは嵐も今は友となりける」(露色随詠集・閑居百首・一八六)の例が見え、後代に用例が増える。一七番歌参照。

○無為 特別な難がないこと。四番判詞にも。

十五番

左勝

家長

29 明けばまたいなばの山の嶺に吹く松のあらしぞ名残なるべき

右

秀能

30 たかまどの野路のしの原ゆきくらし片敷く袖にあらし落つなり

左歌、かの『古今』の歌に「立ち別れいなばの山の嶺におふる」といへるを、「明けばまたいなばの山の嶺に吹く」といへる心よろしく侍り。勝ると申すべし。

【他出】 左右ともなし。

【通釈】

十五番

左勝

家長

29 夜が明けたらまた行く因幡の山、その山頂に吹いている松の強風ばかりが名残であろうか。

右

秀能

30 高円の野の道の篠の原を行くうちに日が暮れて、独り寝の床に敷いた袖に強風の落ちてくる音が聞こえる。

左歌はあの『古今集』の歌に、「立ち別れて行く、因幡の山の嶺に生えている」と詠んでいるのを、「夜が明けたらまた行く因幡の山、その山頂に吹いている」と詠んでいる趣向が素晴らしいでしょう。勝ると申すべきだ。

【参考】

① 明けばまた越ゆべき山の嶺なれや空行く月の末の白雪

(老若五十首歌合・雑・二百廿四番左・四四七・家隆／新古今集・羈旅・九三九)

② 立ち別れいなばの山の峰におふるまつとしきかば今かへりこむ (古今集・離別・三六五・在原行平)

③ 思ひこしいなばの山の嶺にしも頼めぬ松の嵐をぞ聞く

(老若五十首歌合・雑・二百四十五番右・四九〇・宮内卿)

④ 荻原や霜おく色はかはれども嵐を秋の名残とぞ思ふ

(新宮撰歌合^{建仁元年三月}・嵐吹寒草・二十六番右・五二・忠良／三百六十番歌合・冬・十九番左・四六九・下旬)

「嵐に秋の名残をぞ聞く」

⑤ たかまどの野路の篠原すゑさわぎそそや秋風けふ吹きぬなり

(関白内大臣歌合^{保安二年}・野風・一番右・一六・基俊／新古今集・秋上・三七三)

⑥ 木の葉ちりて後はむなしき外山より枯れ野の草に嵐おつなり

(新宮撰歌合^{建仁元年三月}・嵐吹寒草・二十一番左・四一・良経)

○家長 生年未詳一三三四年。源時長男。後鳥羽院の近臣。和歌所開闢として『新古今集』の編纂に関わる。

『正治後度百首』『千五百番歌合』『洞院撰政治家百首』などに出詠。隱岐の後鳥羽院とも連絡があった。著作『源家長日記』。『新古今集』初出。当時、従五位下右馬助。○明けばまた「夜が明けたら」と詠み、現在が夜であることを示し、二句とともに「旅宿」の題意を満たす。①や「明けばまた秋の半ばも過ぎぬべしかたぶく月の惜しきのみかは」(三百六十番歌合^{正治二年}・秋・四十番右・三六八・定家)などの先行例があり、新古今時代以降に多い表現。

○いなばの山の「因幡」に「去なば」を掛ける。判詞の指摘どおり②を意識する。同時代にも「秋もまた

いなばの山の嶺の松かはらし色をしをる嵐に」(最勝四天王院障子和歌・因幡山^{因幡}・一八七・家隆)などの例がある。○嶺に吹く判詞の指摘どおり、本歌の「おふる」を「吹く」と転換する。○松のあらしぞ 題字「風」

を詠む。同じ表現の先行例は少なくなく、「山ふかき松のあらしを身にしまして誰か寢覚めに月を見るらん」(千載集・雑上・一〇〇五・藤原家隆)など新古今歌人の用例が目立つ。特に③は類似する。○名残なるべき「風」

を「名残」と捉える発想は珍しく、④の影響があるか。家長は「滝の音はつららにたゆる深山べの松のあらしぞ峰にのこれる」(正治後度百首・氷・五四九)とも詠んでいる。

○秀能 一一八四一二四〇年。藤原秀宗男。従五位上左衛門尉に至る。後鳥羽院の北面ながら歌才を認められ、和歌所寄人になる。『元久詩歌合』『最勝四天王院障子和歌』『遠鳥歌合』などに出詠。承久の乱後に出家。家集

『如願法師集』。『新古今集』初出。○たかまどの野路のしの原「たかまど」は大和国の歌枕。⑤や「たかまどの野路の篠はら風さえてたまくる袖に葎たばしる」(今撰集・冬・行路葎・一〇一・俊恵／治承三十六人歌合・

三三五)など、院政期に早い例が見える。○ゆきくらし 先行例に「豊国乃^{トヨクニノ} 聞之長浜^{キクナガハマ} 去晚^{ユキクらし} 日之昏去者^{ヒノクレユキヤバ}

妹食序念^{イモラシソオモフ}（万葉集・卷十二・問答歌・三三一・九。二句「クナ」の右に「本」と注記。西本願寺本訓「キクノナガハマ」などがある。○片敷く袖に 上句とともに「旅宿」の題意を満たす。「神奈月よはの時雨に」とよせて片敷く袖をほしぞわづらふ」（後拾遺集・恋四・八一六・相模）などの先行例がある。○あらし落つなり 題字「嵐」を詠む。先行例は⑥が見える程度で、その影響下にあるか。